

久米島におけるワシタカ類とハヤブサ類

久貝 勝盛・嵩原 建二・瀬名波 任

(沖縄県立博物館)

Hawks, Eagles, Vultures and Falcons on Kume Island, the Ryukyu Archipelago

Katsumori KUGAI, Kenji TAKEHARA and Tsutomu SENAHA

(Okinawa Prefectural Museum)

The order FALCONIFORMES in the world is composed of 5 families and 285 species. They inhabit every part of the world except the South Pole. They include family *Cathartidae*, 7 species, family *Accipitridae*, 218 species, family *Sagittariidae*, 1 species and family *Falconidae*, 60 species (1991, Sasagawa). In Japan, there are 3 families and 29 species. On Okinawa, there are two families; *Accipitridae* and *Falconidae* with 21 and 5 species recorded respectively (1991, Okinawa Bird Study Society).

Among them, on the Okinawa islands, *Pandion haliaetus*, *Buteo buteo*, *Buteo lagopus*, *Accipiter gularis*, *Butastur indicus*, *Pernis ptilorhynchus*, *Accipiter soloensis*, *Falco peregrinus*, *Falco subbuteo* and *Falco tinnunculus* have been observed as winter visitors or transients. On the Okinawa islands, only subspecies, *Accipiter gularis iwasakii* and *Spilornis cheela* (only Yaeyama islands) are breeding.

Hawks and Eagles have also been recorded as rare winter visitors or accidental visitors on the Okinawa islands. The different species recorded on Okinawa are as follows; *Buteo hemilasius*, *Haliaeetus albicilla*, *Pernis ptilorhynchus*, *Milvus migrans*, *Accipiter gentilis*, *Accipiter nisus*, *Spizaetus nipalensis*, *Aquila clanga*, *Aquila heliaca*, *Aegypius monachus*, *Circus cyaneus*, *Circus melanoleucus*, *Circus spilonotus*, *Falco columbarius* and *Falco naufragi*.

Until recently the only hawks and eagles that had been recorded on Kume island were *Butastur indicus*. But with this examination, *Pandion haliaetus*, *Accipiter soloensis*, *Accipiter gularis*, *Buteo buteo*, *Falco tinnunculus*, *Falco subbuteo* and *Falco peregrinus* were

also found.

The authors examined hawks and eagles, especially the migration of the *Accipietr soloensis* and the wintering habits of the *Butastur indicus* on Kume island.

Concerning the autumnal migration of the *Butastur indicus*, the authors used the late Mr. Nakayoshi's private letter.

世界のワシタカ類は5科285種で南極を除いた各地に生息している。その内訳はコンドル科7種、タカ科218種、ヘビクイワシ科1種、ハヤブサ科60種で、日本では3科29種であるという(1991、笹川)。沖縄ではワシタカ科21種、ハヤブサ科5種の合計26種が記録されている(1991、沖縄野鳥研究会)。そのうち、主に旅鳥や冬鳥として沖縄で見られるものにミサゴ、ノスリ、ケアシノスリ、ツミ、サシバ、ハチクマ、アカハラダカ、ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ等がある。沖縄で繁殖するのは亞種のリュウキュウツミとカンムリワシ(八重山諸島のみに繁殖)だけである。それ以外に、沖縄で記録のあるオオノスリ、オジロワシ、ハチクマ、トビ、オオタカ、ハイタカ、クマタカ、カラフトワシ、カタジロワシ、クロハゲワシ、ハイイロチュウヒ、マダラチュウヒ、チュウヒ、コチョウゲンボウ、ヒメチョウゲンボウ等は迷鳥またはまれに見られる冬鳥である。

これまで久米島で記録されたワシタカ類はサシバのみであったが、今回の調査でミサゴ、アカハラダカ、ツミ、ノスリ、チョウゲンボウ、チゴハヤブサ、ハヤブサ等が新たに加わった。

筆者等は1987年11月1日～5日、1993年9月11日～9月13日、1994年3月16日～3月18日、1994年9月15日～17日、1994年12月26日～1994年12月28日の調査で久米島におけるワシタカ類、特にアカハラダカの渡りの状況とサシバの越冬状況の概要が把握できたので報告する。なお、サシバの渡りに関しては一部故仲吉列雄氏からの私信(1987)によった。

サシバ *Butastur indicus* とは

分類学上は脊椎動物門、鳥綱、ワシタカ目、ワシタカ科、サシバ属に属する。秋田県以南に夏鳥(繁殖のため、春に日本に渡り、秋に越冬のために日本を去る鳥)として渡来し、低山や丘陵地帯の森林で繁殖する。繁殖は年に一回で卵は2～4個産む。抱卵日数は約30日である。

雄は赤銅色の羽色で頭部が灰褐色を示し、雌は灰色味がなく、頭部も羽色も暗褐色である(清棲、1952; 山階、1980)。雌の方が雄に比べて若干大きい。幼鳥は目の色が黒みが

かった青色ないし青褐色をしているが成長するにつれて赤みの強い黄色やあざやかな黄色に変化する。また胸の縦じまも横じまに変化する。(写真1、2)。

国外では中国東北部、朝鮮半島の一部で繁殖し、大半は華南や東南アジアで冬を越す。

(図1) 久米島を含む沖縄の島々に大群で立ち寄るのは秋の渡りの時である。

なお、琉球で初めてサンバが記録されたのは中山伝信録(1721)で科学的に記録されたのは岩崎卓爾(1927)の石垣島気候編であるという。

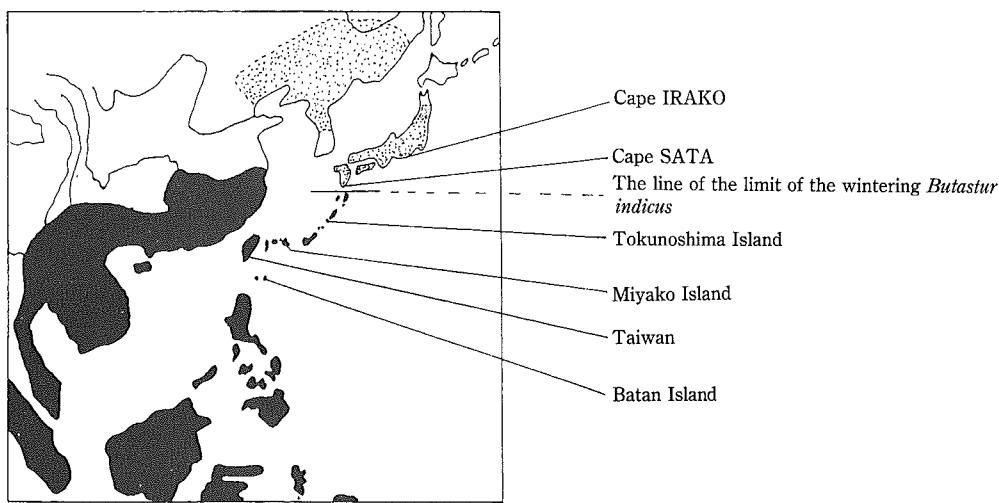
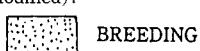


Fig.1 : Breeding and Non-Breeding Distribution of
Butastur indicus and Concentrating Places
During Migration (Wild Bird Society of Japan
1982. Modified).



BREEDING



NON-BREEDING



Photo. 1 . *Butastur indicus*
(Gray-faced Buzzard Eagle)
Juvenile Bird



Photo. 2 . *Butastur indicus*
(Gray-faced Buzzard Eagle)
Adult Bird

サシバの渡り

繁殖地の日本列島においては、8月下旬から9月中旬にかけて渡りの準備が始まる。この頃には数羽のサシバが低山の上空を忙しそうに飛び回っているのをよく見かける。渡りの衝動が高まっていくものと思われる。

9月下旬になると本土の各地からサンバが南下したという情報に入る。渡りのコースについては、まだまだ不明な点が多いがこれらのサシバの一部は日本における第一番目の集団渡来地「鷹一つ見つけてうれし伊良湖岬」と芭蕉が詠んだ愛知県の伊良湖岬を通り、第二番目の集団渡来地、鹿児島県の佐多岬に集まるものと思われる。本州の中部地方での渡りのピークは10月5日～10日の間にある。沖縄諸島では10月12日～18日の間にある。

久米島を含む沖縄諸島にサシバの大群が渡来するのは九州付近にかかっていた寒冷前線が本州の方へ移動し、大陸の強い高気圧が南西諸島を覆う時のようにある。こういう気圧配置の時には佐多岬の風向も北寄りの風に変わりサシバの渡りを助ける。

ところで、本土での最後の合流地点、佐多岬を飛び立って南下するサシバは気象条件が良ければ一気に沖縄諸島まで飛来するのか。この点があまり調査されず不明であったが最近の調査で徳之島とその周辺の島々も集団渡来地であるという事がわかつてきた。

なお、サンバの平均時速はその日の気象条件にもよるが大体40Kmで一日450Km前後飛行すると言われている。

また、渡りの幅は約120Kmでその東端は沖縄島であり、西端は久米島であるという。メインの流れは沖縄本島を中心とする南西諸島沿である（図2）。

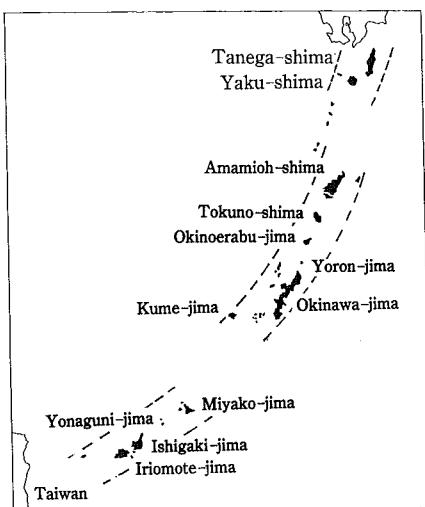


Fig.2 : The distribution of the wintering *Butastur indicus* (Part of shadow) and the width of the migration (dotted line).

故仲吉氏（1987）によると久米島アーラ岳周辺における秋のサシバの飛来時間帯はいずれも14:00～17:00に集中しているとの事であった。久米島アーラ岳周辺で比較的多く見

られた1987年10月11日（30羽）、10月18日（60羽）の両日、サシバの集団飛来地で知られる宮古島では約300羽がカウントされている。単純比較はできないが、久米島に飛来するサシバの数はさほど多くはない。それは久米島が渡りのヘリの部分にあたるからだろうと考えられる。

久米島における越冬サシバの分布

越冬サシバとは、秋の渡り時に最終越冬地の東南アジアまで南下せずに渡りの途中の島々で翌年の三月まで生活する個体のことである。これは種子島（緯度 $30^{\circ} 50'$ ）以南でよく見られる。南西諸島で越冬するサシバの数は3,000羽前後はあるものと推定される。これらの越冬サシバは春の渡り時（3月下旬～4月上旬）に繁殖地に戻る。久米島における越冬サシバの分布状況は図3のとおりであった。

久米島では越冬サシバの個体数はその年によっても、いくらか異なるが、1987年11月1日～5日の調査では15羽、1994年3月16日～18日の調査では21羽、12月18日～20日の調査では18羽、12月26日～12月28日の調査では20羽が確認された。幼鳥と成鳥との比率は1987年11月1日～5日の調査では0:15（全部成鳥）、1994年3月16日～18日の調査では0:21（全部成鳥）、1994年12月18日～20日の調査では4:14（幼鳥22%、成鳥78%）、1994年12月26日～28日の調査では1:19（幼鳥5%、成鳥95%）で圧倒的に成鳥が多かった（表1）。

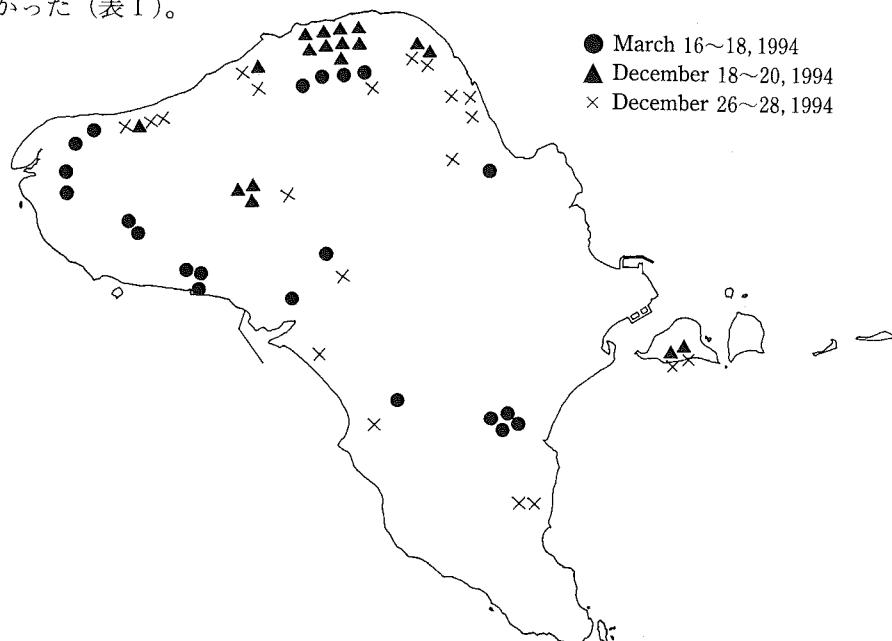


Fig. 3 : The distribution of the wintering *Butastur indicus* in Kume Island.

	Juvenile Individuals	Adult Individuals	Sum
1 ~ 5 , Dec, 1987	0	15	15
16~18, Mar, 1994	0	21	21
18~20, Dec, 1994	4	14	18
26~28, Dec, 1994	1	19	20

Table. 1 . The ratio of Adult bird and Juvenile bird. Showing the number of wintering birds has been increasing gradually day by day. The migratory urge gradually grows more intense.

表1からもわかるように、毎日、月毎に個体数が増加している。これは、もうすでに小規模な春の渡りが始まっている事を示唆している。1994年12月18日～20日、幼鳥は4羽観察されたが、1994年12月26日～28日には1羽しか観察されていない。これは幼鳥が先に移動するという事なのだろうか。

越冬サシバの生活

越冬サシバの生活は実にノンビリしており、朝は6時30分頃から7時頃にかけて自分の狩場にでてくる。狩場近くの電線か木の上で獲物が現れるのじっと待つ。餌を採るのは午前9時頃から午後1時頃の間に集中する。

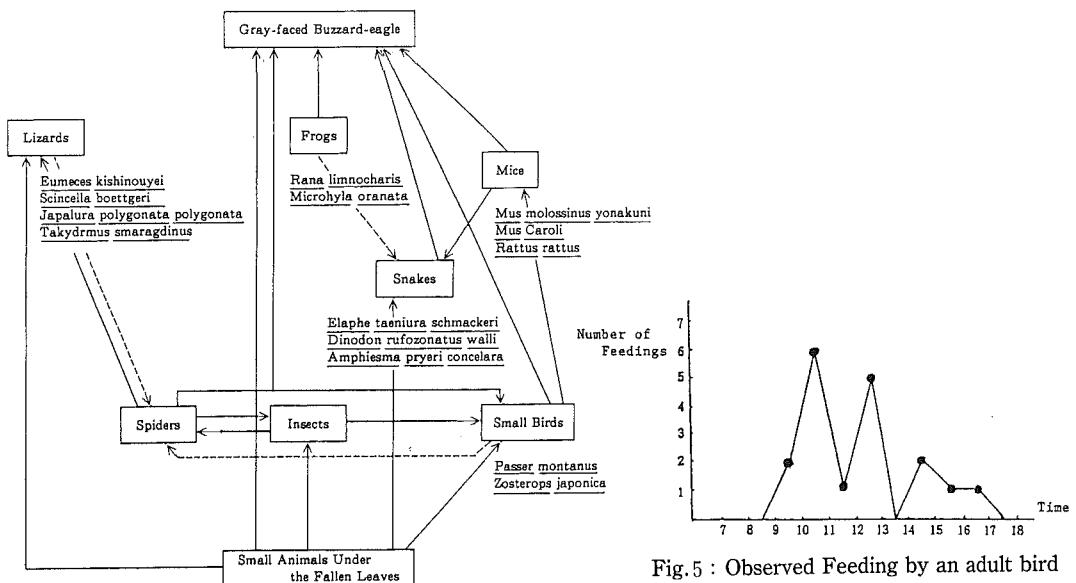


Fig.4 : *Butastur indicus* (Gray-Faced Buzzard-Eagle) and Food Chain.

畠周辺を狩場とするサシバはバッタ類、ハツカネズミ類を森林周辺を狩場とするサシバはトカゲ、カエル、ヘビ類を主な餌とする。補食回数は餌の種類にもよるが大体1日10～20回である。宮古島ではサトウキビ畠でセスジツチイナゴを1日15匹も補食しているサシバを観察した。

越冬サシバは1ha前後のテリトリーを作つて自分の狩場を守つてゐるが、テリトリーの解消はわりと早いようである。1月の中旬頃にはすでにテリトリーを解消してゐる個体もある。

アカハラダカ *Accipiter soloensis* とは

朝鮮半島や中国東北部で繁殖し、日本では渡りの時に琉球列島や男女群島を通過し（高野1980）、冬期はマライ諸島、ニューギニアなどに渡る（小林1980）。台湾では留鳥である。下面は白く胸から腹にかけては赤褐色である。虹彩は雄では紅色、雌では黄色である。幼鳥の胸及び腹部には大きめの縦斑が出る（黒田1984）。水田地帯を生活の場とし、カエル、トカゲ、バッタ等を主な餌としている。水田近くの松林に営巣する。島根県で1989年6月に営巣したが、繁殖に失敗した1件あるのみ（1993、池長）で、これまで日本では記録は少なく迷鳥として扱われていた。

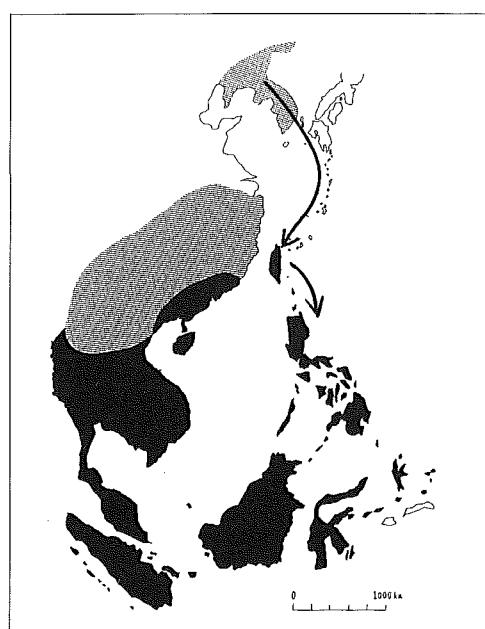
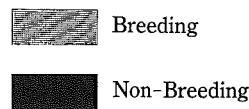


Fig.6 : Breeding and Non-Breeding Distribution of *Accipiter soloensis* and migration route.
(Handbook of the Birds of the world
Vol.2, 1994, modified)



アカハラダカ *Accipiter soloensis* の渡り

アカハラダカの渡りについては1980年9月に宮古島で山本晃氏等によって230羽の群れが確認され、その後の調査でサシバと同じくらいの規模で南西諸島を渡るという事が確認されている。サシバは朝6時頃には次の目的地へ向かって一斉に飛び立つがアカハラダカは7時30分頃から8時30分頃にかけて飛び立つ。1993年9月11日～13日、1994年9月15日～17日の調査による久米島からのアカハラダカの渡去状況は図7、8のとおりであった。

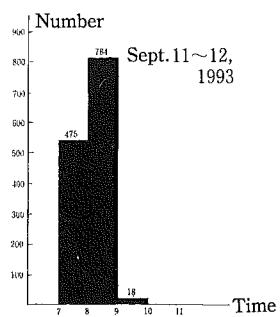


Fig.7 : Departure of *Accipiter soloensis* in the morning from kume island.

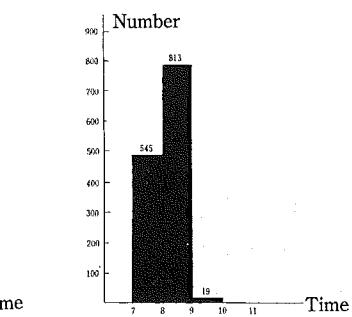
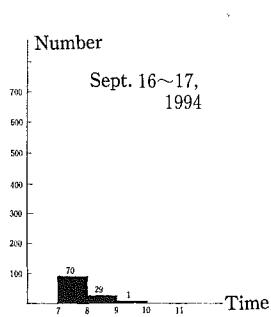


Fig.8 : Total Number of *Accipiter soloensis* departed on 11～12 Sept. 1993 and 16～17 Sept. 1994 by Time of Day (Hour).

その他のワシタカ類

ミサゴ *Pandion haliaetus*

1994, 3, 17/1994, 12, 26. 真謝海岸、比屋定海岸、謝名堂海岸。冬鳥として毎年1～2羽見られる。ホバリングしながら足から水に突っ込み魚を捉える。

ツミ *Accipiter gularis*

1987, 11, 1. アーラ岳周辺、ダルマ山周辺。個体数はきわめて少ない。冬鳥。小鳥類(スズメ、メジロ等)を襲って食べる。

ノスリ *Buteo buteo*

1987, 11, 1. アーラ岳周辺、ダルマ山周辺の開けた所。たまに旅鳥または冬鳥として見られる。ネズミ類、トカゲ類を食する。

チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

1994, 12, 26. 宇江城。個体数は少ない。冬鳥として毎年2～3羽見られる。サトウキビ畑周辺でホバリングしながらねらいを定め急降下して昆虫類、時にはネズミ類も捉える。

チゴハヤブサ *Falco subbuteo*

1994, 3, 16. 清水小学校近く。たまに旅鳥として春秋の渡りの時期にみられる。個体数はきわめて少ない。小鳥類を食する。

ハヤブサ *Falco peregrinus*

1994, 12, 27. 仲地。まれに見られる旅鳥または冬鳥。はばたきながら直線的に飛ぶ。翼をすばめて急降下して小鳥類やときにはカモ類を襲ったりする。

おわりに

この調査を行うにあたり久米島仲里村、具志川村の両教育委員会、故仲吉列雄氏のご家族の皆様方には大変便宜をはかっていただきました。また、当博物館の宮平真由美、西村晃子両氏には、資料整理、図版作成等でお世話になった。心から感謝の意を表したいと思います。

参考文献

- (1) BROWN, L., D. AMADON, 1968. *Eagles, Hawks and Falcons of the World*. London, Country Life Books.
- (2) 伝統と現代社、1974。岩崎卓爾一巻全集（石垣島気候編）。
- (3) 徐葆光、原田禹雄訳注、1982。完訳「中山伝信録」、言叢社。
- (4) 清棲幸保、1952。日本鳥類大図鑑 2、講談社。
- (5) 久貝勝盛、1983。サシバ *Butastur indicus* の渡りと宮古島、沖生教研会誌（16）：6-14。
- (6) ———、1986。The Life Cycle of the Gray-faced Buzzard-eagle. 国外留学生研究報告集。沖縄県人材育成財団。Vol. 1 : 129-170.
- (7) ———、1988。南西諸島におけるサシバの秋の渡りと越冬サシバの生活、沖縄県立教育センター研修報告集録、第30期 理科76号 : 193-204。
- (8) ———、1993。A BASIC STUDY OF MIGRATORY BIRDS. 国内・国外派遣研究員研究報告書、第2号 : 7-37。
- (9) 小島幸彦、1982。サシバ *Butastur indicus* のテリトリー行動。Tori, 30:117-147.
- (10) 岡 徹、1985。サシバが飛来する時刻からの考察・沖生教研会誌 18:15-19。
- (11) Wild Bird Society of Japan, 1982. A Field Guide To The Birds of Japan.
- (12) 山階芳磨、1980。日本の鳥類とその生態、2. 復刻版。東京、出版科学総合研究所。

- (13) 高野伸二、1980。野鳥識別ハンドブック、日本野鳥の会
- (14) 小林桂助、1980。原色日本鳥類図鑑、改訂版、保育社
- (15) 山本 晃、1981。野鳥、No 423、日本野鳥の会
- (16) 笹川昭雄、1993。タカの渡り入門、BIRDER 5 (10)、Oct. P 6 ~14.
- (17) 岡徹、久貝勝盛、座喜味英二、砂川友弘、1985。宮古島におけるアカハラダカの渡りの概要。沖生教研会誌、18:20-22。
- (18) 沖縄野鳥研究会、1993。沖縄県の野鳥、改訂版、沖縄出版
- (19) Lynx Edicions Bird Life International 1994, Handbook of the Birds of the World Vol. 2.